

新しらい佛敎雜誌

淨土

五・六 月 號



法然上人鑽仰會發行

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十三年五月廿日印刷 昭和二十三年六月一日發行

第十四卷

第四號

身の毛もいよだつべくを、のちに思召し候は

本意なく候へどもそれもことはりにて候

罪つくる事こそ心にもそみて覚え候へ

念佛にて往生することは此度初めにて候

されば屹とは信ぜられ候はぬなり

——法然上人——

目次

因果と縁起……………(三)

中村辨康

宗教隨想……………(九)

吉原元明

女性の重寶を思ひて……………(五)

長谷川宣教

新佛教議論……………(七)

B N 生

信仰相談……………中村辨康(一〇)

存在觀と淨土の信仰、宿善開發

護符お札の効用、入信の順序

編集後記……………(一〇)



因果と縁起

中村 辨 康

一般に佛教とは因果を説く教であるかのやうに思つて居る人が多いやうであります。

それは淨土教に於てさへも「兼信因果」と云つて正しくは一如來の本願一即ち他力を信するものではあるが、兼ねては道德を捨てるものでないから「因果の理」を守つて居なければならぬとして居るのです。況して自力を主とする教では因果を中心として居ると考へるのは至當かも知れません。善いことをすればよい結果となり悪い事をすれば悪い結果となるのは當然であるとの考へなのです。

然るに淨土教では悪いことをし通しの惡人が佛の本願を信じて念佛しさえすれば直に救はれて善い結果としての淨土への往生が出来ること云ふのですから全く「因果の理」に反して居るのであります。「兼信因果」とは反對の立場にあるわけです。即ち因果律では大因は大果を得るのであり、自因は自果を得るのであつて、小因が大果を得たり他因が自果になつたり惡因が善果になつたりすることは絶対に許されないのでございます。然るを如來の本願（他因）に依て往生（自果）が得られ、念佛（小因）だけで凡入報土（大果）が與へられ、悪いこと（惡因）をしつづけて居りながら淨土（善果）に行かれること云ふのは、確かに因果律に反して居るものと云はねばなりません。

それでは何故に「兼信因果」と云ふかと云ふに、これは生活の上に道德を重んずべきことをすゝめて居るからであります。かの「五逆十惡のものも生ると信じて小罪をも犯さじと思ふべし」の御法語がそれでありす。五逆十惡の者が救はれること云ふことは確かに因果を無視したことです。然かも小罪をも犯すまいと心掛けることは因果を尊重して居ることです。論理的には大きな矛盾であります。信仰の喜びを如來の不思議功德としてその御恩を思ふにつけても惡を惡として排除し、善を善として行するところの道德を守ることが、直に報恩の意味ともなることを勸説するのであります。だから矛盾でありながら、しかも矛盾ではないのであります。

一體因果の理は法律や道德の基礎になるものです。道德の方は必ずしも純粹の因果の理法にのみ準據するものではありませんが、法律は因果の理に據らないと事件の處理が出来ないのであります。それ故法律に取つては因果の理は金科玉條なのであります。

ところが道德の方では必ずしもさうではありません。社會と云ふ横の方面が考へられるからです。とは云へ横の方は廣げれば、天地一切に關係して來ますので、それではやはり物ごとの處理が餘り廣範圍に亘りますから、よい加減のところでは切り上げます。即ち或る範圍で責任をきめなくてはならぬからです。

然しながら天地の實相はもつと廣い範圍のものであります。責任には輕重の差こそありましても全體に關係して居りますから簡單に個人だけで定めることは出来ないであります。即ち因果關係だけでは理窟が通りません。例へば今度の戦争について見ましても、或る一部の指導階級の人達が段々戦争に追ひ込んで國民全體を動かして、遂に國體にまで大きな變化を與へる結果になりましたが、その敗戦の苦しみは、この戦争に幾分でも關係を持つた私達がそれを受けるのはよいとしても、今後に生れて来る子供達にまでそれを背負せねばならないと云ふことは、單なる因果律だけでは納得が出来ません。

之れは直ちに天地の實相は「因果の理」を以ては説明すべきでなく「緣起」に依るべきものであることを證明して居るものであります。

緣起とは凡ての現象は諸緣の和合に依て起るものでありと云ふ意味のことでありまして、この理を知ることによって、宇宙間の實相が判明し随つて個在的なものは一つもないこと即ち「無我」がわかつて参ります。因果の理ではどうも個在的になり易いから、道德的な教訓には必要ですが、無我を諦觀することは絶対に出来ません。緣起の理に徹して初めて無我を悟り得るのであります。それ故に「緣起を見るものは法を見、法を見るものは佛を見る」と云ふ釋尊の有名な言葉も「成る程」と理解が出来るのであります。

緣起を知ることによって依て天地の理法を知り得ます。朝顔の花一つを見るにしても因果だけでは説明が足りません。種を蒔けば花が咲くと云ふ説明は本當ではありません。土へ種を蒔いても光も熱も水も空氣もなければいく

ら時間と空間とを與へても芽は出ませんし花も咲きません。そこには水も光も熱も空氣も肥料も時間も空間も人も工も調ひ、そしてその諸條件の適當の配合があつて初めて芽が出て生長し花が咲くわけであります。それに依て朝顔としての個性も發揮出来しますが、さればと云つてその個性が獨り立ちして居るわけではなく、諸緣に依て立てられて居るので、云はゞ「無我」なのであります。これが即ち「佛法」でありますから、この理を體得したことが「法身」を得たことになり本當に「佛を見た」ことにもなるのであります。

然し「因果の理」と云ふものは社會秩序をたもつ上に必要なものであり、小乗教などではこれに固執して居りますから「因果を破るに因果を以てす」と云ふ言葉があります。固執して居る因果の理を破るために「因縁果の理」を説いて因果の中に「緣」と云ふ横の關係を入れた前の豎の關係だけのものを訂正させます。それは緣起の理に導く暫定的な説であります。實際には果はあるにはありますけれども、その果も刻々に變化して居ます。つまり固定的ではないのであります。例へば何かで苦の結果を見るにしましても時間と共に段々薄れて行くからであります。

それ故に實相は緣起であつて因果ではありません。然しながら、いきなり緣起を説いても老幼にはわかりかねますから、初めに因果を説いて設々に宗教思想をすゝめて行くのであります。

尚ほこの緣起が信仰の上に説かれるとそれは「性起」と云ふ問題になります。即ち信仰に依て佛性が現はれるからであります。此の事はまた別の機會で申上ります。



女性の重責を思いて

長谷川宣教

— 女性性の重責を思いて —

日本女性が今日程大きな使命を、課せられた事は未だ曾てないと思ひます。男子と同様の任務を負ふといふよりも、女性には保育、家事、教養に關して免ぬがれ難い任務を持つ上に學問、政治、職業、信仰等に新しく男子に獨占された分野まで分擔されることになりました。

今、衣食住の悩みは男子にも持ちますが、女性には大きな責任です。新女性を考へる時殊に、若い女性が婚期にあつて多くの男性が戦災で還へられないために、起る色々の悩みを訴へられる時、未熟な私に解けぬことが多いのです。

今更に省みて、釋尊御在世の御改革、御指導を見直して感を深くしてゐます。釋尊當時の社會、生活、思想上のことは色々専門の研究もあります、伺へば伺ふ程、根本的方向轉換であり大改革であつたと存じます。其中最も大きいものは女性の解放即ち、優婆夷信

女の教團が大きく浮き上つて來ました。其主な人は韋提希夫人、摩利夫人、須賴婆夫人、須昆耶、久壽多羅、須達女、無優、捨彌、鬱多羅難陀母、迦羅、昆舍佉彌伽羅母、最勝、光月、優那、奢摩羅帝等數へきれません。之等かぎりない女性のめざめと高められた力が男性を力づけ、印度中部地方の國々を文化に導いた事蹟は全くおどろくべきものがありました。殊に比丘尼教團の成立は釋尊自身が拒絶され、躊躇された程困難な問題であり可否共に、後世に大影響あることを察しられて慎重に取扱われた大問題でありました。それは出家比丘沙門の生活は、印度に前から行われた事ですが女子は當時まで奴隸の如く、壓せられ牛豚何匹かに交換された商品でありました。これを獨立人として男子同等にみることは容易でない、まして出家比丘の如く社會から尙ばれ供養されるものにするとは思ひもよらぬ殊に佛教沙門は、眞の婆羅門最も優れ

たものとして嚴肅に教育し、教化任務に働かせ教團も互に相いましめ世の批難を招かぬ様に心がけ、すべての點の指導者となつて人生の改革、正しい宗教生活を立てようとせられた時に、女子が比丘尼、沙彌尼としてこの同様な地位に立ち女性教團を樹立するは思ひもよらぬ、釋尊は人格、平等、殊に母性尊重の立場にあり生後幾許もなく實母世を去り、異母に養育された大恩を感謝し、恩母のためにはいかなる報恩をもと念じられても摩訶波提婆曇彌が血涙を注いで懇願されても尙、拒絶された程難事でありました。然し求道の熱意と阿難の斡旋と、釋尊の熟慮とが終に大愛道比丘尼を始め、多くの釋女の出家、各地の大比丘尼の輩出となり人類史上に新分野を開きました。其主な氏名等は擧げるまでもありませんが参考のため、二三の出據を記して置きます。

南傳大藏經の比丘尼捷度、相應部の比丘尼

相應、小部の長老比丘尼偈、國譯一切經の増一阿含の比丘尼品等は纏まつたもので誰人もすぐ氣づかれるもので散出した材料も甚だ多い。之等の教團が在世佛教の一角をなして、女性の修道淨行の高い生活を開いたばかりでなく、一般人生を中心とされた佛教が滅後には比丘佛教となつた様だが、護法、相續の一面は、比丘尼教團の力も少なくなかつたと思

はれます。其最も著しいものは佛法が愛育王の力によつて十方に傳道されたといふ有名な歴史の中にも、セーロンに行つたのは王子マヒンダ比丘達を伴つたと同様に王女衆友が比丘尼團をひきいて、傳道されて今にセーロン佛教が残つた様に、佛教傳道史の各國初期には比丘尼の活躍がみられる。社會が安定し文華が咲きすぎると尼衆が委縮して其機能が

明らかでない。今日日本の女性の重責を思ふとき教養をたかめ如何なる面にも、明るい、清い信力を持ちつつ強く新日本を築き上る女性がいよいよ望ましいと思ひます。かくれた強い信仰の佛教女性史を明らかにしたいと少しく研究を始めました。求めらるるままに少篇をかかせて頂きました。

新刊

中村辨康著

法然上人とその信仰

菊半截八十頁
定價參拾圓(送料五圓)

由來宗教は科學と抵觸するものと考へられて居りましたが、それは宗教の神秘性が科學と相入れないやうに思ひ違ひして居たからであります。然もそれは小神秘にのみこだわつて居て、目前の大自然の大神秘性を考へなかつたからであります。

この大自然の力こそは宗教の目指すところであり、隨て大自然科學は宗教に依てのみ正しく解明發達さるべきものであります。法然上人の宗教は科學以上のものであります。それ故阿彌陀佛もその淨土も、極めて自然的なもので、それはむしろ大科學の究明に依て、今後益々はつきりされて來ませう。

本書は此點に着眼し聊か常識に訴へて、これが表現を試みたつもりであります。ですから譬へ宗派を異にする方々に取つても、大きな示唆となるものがあらうと存じます。敢へて御一讀をおすゝめする次第であります。

東京都港芝公園五ノ一〇

發行

法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番

新 佛 教 講 座

宗 教 の 神 秘 性

— 宗教と科學とは矛盾するか —

大概の人々は宗教と科學とは或る程度矛盾するものと考へて居るやうであります。これは宗教には必ず神秘性があるものと限定して居るからであります。即ち人間以上の或る不可思議の存在を信じて行くのが信仰だと思つて居るからであります。

茲に宗教の不徹底があります。神秘と迷信とは親類だからであります。文明教である佛教や基督教にも迷信的なものがあるのはこの爲であり、また科學者が凡ての宗教を以て「非科學的迷信」と斷定し勝なのもこれが爲であります。これは正しく宗教が不徹底だからであります。イヤ宗教者が不徹底だからであります。少くとも佛教の場合は佛教者が不徹底だからであります。神と云ひ佛と云ふもの皆な悉くと云つてよい程色々な宗教において神秘的存在として

居りますが、それを物的な意味に解する限り皆な迷信であるに相違ありません。

信仰と云ふものが字の通り「信じ仰ぐ」と云ふ「仰ぐ」意味をも持つて居るのでありますから、人智を以ては計り知ることの出来ないものの即ち「神秘的」なものの「不可思議」なものを對象として居るのではありますけれども、他の宗教は知らぬこと、佛教にあつては「悟」と云ひ「後得智」と云ひ「正覺」と云ひ「覺者」と云ふ言葉があるやうに、その神秘の内容が或る程度人間にも判り得ることを許して居ります。されば佛とはその内容の全分を知つた人であり、菩薩はその一分を知つた人であると云つて居るのですから、不可思議と云つても全部踏込むことの出来ないやうな隔絶した領域ではないのであります。若し全然隔絶した境地であるならば、むしろ人間には縁遠いものであり特權階級的意識の下に組織されて居るものであります。

佛教中に説かれてある小さい神秘の中に「六神通」と云ふものがあります。天眼通、天耳通、神足通、他心通、宿命通、漏盡通の六つであります。天眼天耳神足の三は感覺的なものの鋭敏さであり、他心宿命の二は推理の力であります。この五通は更に發展して七十二變とか三十六變化とか云ふやうになり、かの支那の有名な小説の「西遊記」などでは「孫悟空」が妖怪と互ひに變化を以て戦ふことなど説いて居り、神足通については筋斗雲と云ふ雲に乗ると一と飛びに一萬八千里飛ぶなどと云ふやうな話にまで發展して居りまして謂はば手品師見たやうですが、こんなのは要するに造り話です。然し、松本文三郎博士の本で見たこととありますが、現在印度のヒンヅー教の行者などには奇術のやうなものを使ふものがあるとのこととあります。それは一種の催眠術を行ふものらしいのです。こんなのは人の眼をくらますも

ので不思議でも神秘でもありません。西洋でも最初の傳道者に奇術を使ふものがあつたさうです。つまり未開人に一種の驚異を興へて宗教に導かうとしたものです。日本でも昔はキリシタンバテレンの法などと云つて不思議なことをしたと傳へられて居りますし、また飯綱使ひなど云ふものがあつて今で云ふ類似宗教宣傳の道具に使つたのでした。それが更に發展して「忍術」と云ふものに變化しても居ります。支那などでは水滸傳でも三國志でもその他色々な小説や剪燈新話など云ふ短篇集などにも色々不思議な神通話があり、日本でも「靈異記」など云ふ本もありますが、何れも幼稚なもので宗教的には取るに足らないものです。

次に第六の漏盡通と云ふのは、これこそ佛教の求むる神秘であり、これなくしては前の五通は社會の害毒にこそはなれ、役に立つものではないとして居ります。つまりは漏盡通に裏付られて初めて前の感覺の鋭敏さも推理の力も役に立つものと云ふのであります。

「漏」とは「もれるもの」即ち煩惱のことであり、即ち人間の本能が度を越すことであります。さう云つた本能的欲望を抑制し得る力又は克服し得る力のことを漏盡通と云ひます。つまり「漏を盡きさせる」力のことでもあります。

然しこれ等は尙ほ人意的なものであり訓練に依て獲得し得るものがありますから「小神秘」であります。そんなことよりも大自然の力人力を加へることの出来ない力の方が最も大なる神秘であります。即ち松杉等の實がどうしてあんな大木になるのでせうか、菊を植へ朝顔を蒔けばどうしてあんな美しい花が咲くのでせうか、またどうして人間が植物の吐いた空氣を吸はなければ生きられないのでせうか、どうして植物は動物の吐いた汚れた空氣を吸はねばならないのでせうか。

また同じ食物を喰べながら猫は猫になり、犬は犬になり人間は人間になるのでせうか。同じ食物ならば猫型から人間型に變化しさうなものです。それがちつとも變化しないのはどう云ふわけでせうか、また米の飯や菜ツパがどうして人の肉になり、骨になり、皮になり、毛になるのでせうか、こんな大きな神秘が目の前にいくつも列べられて居るのに、それをちつとも不思議がらないで、病氣がなほつたとかお金が儲かつたとか云ふちつぽけなことを不思議がつて居るなどは實に馬鹿氣切つて居ります。

神降しなどでも自己催眠に陥ちて何かしら譯の分らぬことを口走つて居ると、聞く人の方で勝手に解釋して「あたつた」とかあたたらぬとか云つてすぐ信用してしまふのです。貸して呉れた小提灯には感謝しても太陽のやうな大提灯の恩恵には無關心で居るやうに、宗教に於ても大神秘には無關心でちつぽけなインチキな神秘には感心してしまふなどは如何に自分が無智であるかを白狀するものだと思ひます。

正しい大神秘は科學と矛盾しません。酸素と水素と化合して水になると云ふ大神秘は神秘がそのまま理論ですが、唯だ「化合」と云ふ言葉にごまかされて神秘が感ぜられないだけです。この故に神秘は決して科學に牴觸するものではありません。科學はまだ本當に大神秘を完全に説明することが出来て居りません。唯だ元素だのエネルギーだの光だの力だのと云ふ言葉でそれ以上を追求して居ないだけであります。もう少し神秘をお互ひに研究したいものです。(BN生)

月は一つなれども影は萬水に浮ぶ。

佛は一つなれども感受はまぢまぢなり。



道 の 歩 み

吉 原 元 明

自力他力と云ふ事は單に成佛の方法であり佛教の取扱ひ方であると云てしまつては、完全な表現とは云へない。なぜと云ふに自力も他力も單なる教義方程式でなしに、其の奥に人間としての宗教要求から出發しているからである。如來大悲本願の力が強く魂に響くのも、現實の人間觀を自覺したやるせない感情が、かく信仰させていたかくのである。然し私の信仰は感傷的ではない。勿論享樂的でもない。生活から遊離した未來主義でもない。云はば善導大師の釋文にある無常識罪惡觀輪廻觀を私自身に自覺して彌陀大悲願力の大精神に直結した信仰なのである。此の大精神は時間の制約は絶對的

であるが、享受する私には目的を未來に於いてぐんぐん進んでゆく所に、三世一貫の強い現在の大地を歩み行く、歡喜と光明との人生觀があるわけである。時代がいかにかはりマルキストが宗教は阿片なりと叫べんたとしても、私と宗教とは一向に分離はしない。それは宗教は進展性と創造性で生きゆく心の事實であるからである。

マルキストが唯物史觀の上に立て宗教を敵に廻はしてゐる、何時の時代かには唯物主義的考へかたと理想主義的考へかたととは唯一の不可分の發表の中に合一してゐると云ふ反省がくるものと思つてゐる。

彌陀の本願力を本質的に合法的に説きさり説き來る事は時代思想家には歡迎され、時代人には叫ばれるが、それは單に歡迎であり肯定であり迎合であつて深く凡夫觀に徹した時單なる理論だけでは依然として救はれて居ないのである。此時にあたり善導の凡夫觀は、凡夫の私には強く胸をうつのである。そして私には私の爲の報身の阿彌陀佛と、信仰して奉るのである。

「至極大乘の法は名の外に體なく、體の外に名なし」で此の本質的信念に根ををろした私の信念は理窟なしに念佛精進の一道を歩むのである。

信 仰 相 談

信仰上の悩みや佛教についての疑惑にお答えします

擔 當 中 村 辨 康

存在觀と淨土の信仰

(問)

教義も時代と共にその表現方法が變化するのは止むを得ないことかとも思ひますが、近頃の「淨土」は戦前のものと大分かけ離れて佛教の解剖的方面のものが多く何か知ら迫力が薄くなつたやうに思はれますのは、私がまだ未熟であり偏屈であるのかも知れません。然し若し祖師方の種々の奇瑞とかまたは地獄極樂の物語などが單なる存在觀から來て居るものとするならば、三部經やその他の教論も信するに足りないことになりはしませんか。

凡そ祖師は有は有、無は無、中道は中道とそれぞれ經論から宗派を立てられたものと存

じます。法然上人も極樂は一期の間及び次生にも有るものとして念佛門を立て現堂二世の利益をすすめられたものと存じます。されば勅傳、選擇集の中に上人の信條教義が明かされて居ると思ひます。

禪宗には禪宗の特色、眞言には眞言の特色があるやうに淨土宗には淨土宗の特色があると思ひます。基督教が現在に於てもやはり基督教本來の教義を述ぶる如く、教義は時代に依り教へ方に少しの變化はあつても、奥旨には變りがないと存じます。

かく申上ぐる小生の愚鈍なることをお笑ひ下さい。唯だ願ひたいことは今後淨土宗本來

の信仰を一行でも一頁でも多く出されて懇ろに御教導下されるやうお願い申上ます。

小生の考へが若し淨土教に背き居りますればどうぞ解りまするやう御教誡下され度お願い致します。(奥市・西惣付町・永田教眞)

(答)

卒直のお感じをお示し下さいまして誠に有り難うございます。確かに戦前のものより味が無くなつて、信仰と云ふよりもむしろ理論に傾いて居ることは事實で、何共申譯がありません。此點私共も氣がついて居るのですが、何しろご承知のやうに紙面が少ないので、うるほいのある隨筆物が少く私のものなど小理窟ばかり申上げて何共汗顔の至りと恐縮して居る次第であります。

但し私の申上げたことは、休戦以來殊に神佛の信仰に對してそれは非常に低調の

ものであつて、もう新しい時代にそぐはな
いと考へる人が多くなりましたし、時代は科
學尊重時代であつて若し科學に抵觸するやう
な宗教ならば先づ以て自分達には不必要であ
るとさへ考へる人々もあるわけでございます
す。ところが他宗教は知らず、佛教に限つて
決して科學に抵觸することはなく、むしろ科
學が發達すればする程佛教の光が輝くのでは
ないかとさへ思はれますのに、多くの人は
佛教に對する理解がなく、佛教も亦た低調の
ものであつて取るに足らないと考へて居るら
しいです。そして特に地獄極樂を説くなどは
輕蔑してよいことであるとまで云つて居るの
です。私共佛教徒に取つては誠に残念であり
ます。之に對して何とか正しい理解を持つや
うにして頂きたいと念願したわけだったので
あります。

そこで從來から師事して居ります椎尾先
生から色々とお教へを受け、もう二十何年か
前ですが、私の舊來の思想信仰に若干の修正
が加へられつつありましたのです。それは如
來様に對する存在觀の問題でした。私が始め
辨榮上人に就き念佛三昧に専心したのもこの
佛の存在に對する疑問の解決を念願して熱烈
な求道心を起したからであります。

親鸞上人は「法然上人にすかされ參らせて」
信仰に入つたとの事です。私のやうな菜つ
くばりは勿體ないことですが、法然上人の御
法語を讀んでも信仰にはなれませんでした。が
唯だ現實的に辨榮上人の人格に化せられつつ
僅本さんや土屋さんの指導を受けて一時は氣
狂ひのやうになつて念佛に精進し信仰を求め
ました。幸に念佛實踐に依て辨榮上人の印可
を受け、更に椎尾先生の御指導を得て今日に
至つたわけで、決して單に理窟をのみ追求し
て居た譯ではありません。宗教感情の上にも
隨分修練を受けました。泣いて泣いて泣き暮
らしたこともあります。三日も四日も食事が
通らず食事中もボロボロ涙をながして居たこ
ともあります。

そこで今私が申し上げたいのは、私達の
頭の中から「存在觀念」を捨てることが本當
だと云ふことでありまして、存在の否定では
ありません。存在觀念の否定なのでございま
す。即ち「有」と云ふも「無」と云ふも皆な
存在に對する觀念であり考へてあります。が、
何故に存在を考へなければいけないのでせう
か佛の存在を考へるよりも「無量壽の如來様」
を考へたらいいいではないですか。生きどほ
しの如來様を拜んだらよいのに、佛像的な存

在を考へなくては信仰にならぬと云ふのは大
きな誤りであると思ひます。云ひ換へれば
「かぎりなき大みいのち」を拜みさへすれば
よいのに「存在としての佛」でないと承知が
出來ないと云ふのは、何としても私達の常習
からではありませうが、それでは佛教本來の
意義に違ひますし、正しい信仰にはなれませ
ん。すぐ疑ひが出て來ます。よし假にそれで
信仰を得て居ると致しましてもそれは低調で
あつて、インテリ層からは輕蔑されてしま
います。

また「地獄極樂」とよく一口に申しますが
地獄は地獄であり極樂は極樂であつて、信仰
上では對照的に考へてはいけません。對
照的に云ふ場合は多くは教訓的であり道義的
であります。即ち善因善果としての極樂、惡
因惡果としての地獄と云ふ苦樂の結果を道德
的に結び付けて云ふ場合であります。

三部經にもこの地獄極樂のことが書いてあ
るやうなあなたの言葉ですが、三部經中には
地獄のことに就いての特別な文字はありません。
阿彌陀佛の淨土としての極樂が阿彌陀經
や觀經にあり、また淨土の成立のことが大經
に説いてはありますが、純粹に地獄のことは
書いてありません。唯だ道德上の對照として

大經の五惡段の中に「自然の三途無量の苦惱あり其中に展轉して世々累劫に出現あることなし解脱を得難し痛み言ふべからず」とか又は「身死すれば行に隨つて三惡道に入る」とか云ふ文句はありますが、極樂との對照よりも道德實踐の爲に説いて居るわけで、信仰として云つて居るものではありません。三塗は刀塗火塗血塗であつて苦を表現し、三惡道は地獄道餓鬼道畜生道であつて、この世界に地球があるやうな有り方でなく、特に「道」と云つて苦を産む生活のことであり苦の「實踐」のことでもありますから存在觀念で考ふべきものではないかもしれません。

無論淨土教には淨土教の特色がありますが地獄極樂を説くのがその特色ではありません。法然上人は「凡入報土」こそ淨土宗の特色であり、之が爲に立教開宗したのだと仰せられて居ります。無論選擇集に淨土の特色が充分出て居ります。この報土は彌陀の淨土即ち極樂ではありますが、地獄極樂と續ける道徳の問題として説いて居るのではなく、彌陀の世界として説いて居るのであります。

淨土教に於ても有無の二邊を離れてかぎりなきいのちを中心に考へることが正しいと思ひます。隨て存在觀を否定することは存在を否

定することではありません。例へば「私」を考へるのに「私が存在して居る」と考へてはいけないのです。つまり「私は生きて居るがこれをもつとよく生かすにはどうすべきか」と云ふことを考へるべきであります。私を「ある」と考へたとて何になりますか。私の爲に何の多足にもならないではありませんか。それを存在觀と云ふのです。それよりも「私はどう生くべきか」と云ふ生命觀的に考へる方が私の爲によいではないでせうか。信仰もまたその通りです。生きて居る如來様に歸命信賴するのがよい。固定した存在觀佛敎的如來様がよい。存在觀で考へるのは信仰ではなくして執着です。信仰だつて「生きもの」

宿善開發と云ふことを

(問)

よく御説教で信仰にはいるには宿善が開發するからであると聞きますが宿善と云ふものは、私の生れない前の善事と云ふことかと存じます。若しさうだとすれば私と云ふものは現世に生れて來ない前、即ち過去世に於て存在して居たものと思はれます。それが即ち靈魂と云ふものではないでせうか。しかもそれは私には自覺がない。つま

です。椎尾先生は「信仰は進行なり」とも云はれましたが、段々生成すべきものであり、生活の業務にあらはるべきものであります。この邊のことを充分お考へ下さい。

但しお説の雜誌淨土が宗教情操を養ふものでなく理窟ばかりこねて居ると云ふ御叱りは有り難く頂戴いたします。今後は御説の通りにつとめたいと存じます。誠に有り難うございました。唯だ恨みに思ふのは紙面が足りないことです。と云つて今の處經濟上の悩みがありました。紙面を増すことが出來ません。どなたか特志の方はないでせうか。現在は四苦八苦です。私などは全然奉仕して居る有様なのです。御同情下さい。

り私の知らぬことです。その知らぬことが或る人には働き或る人には何のこともないとは一寸可笑しなものです。どう云ふ譯でせうか。この邊の消息を委しく教へて下さい。

(兵庫・武庫・伊奈子・吉岡)

(答)

お訪ねの宿善開發とはよく眞宗で云ふことですが、信仰に入る機縁の熟したことを云つたものです。機縁が熟するに

は色々な條件に恵まれないといけないのです。たとへばその人の両親なり家庭が信仰的であるとか、お寺が近くてよく行つてはお話をきく機会が多かつたとか、またそのお寺の住職が非常に教化に熱心であるとか、またお寺の家族の人達が信仰的で近隣に多くの影響を與へて居るとか、友人に熱心な信仰家があつて誘導されたとか其他色々ありませうが、同じ家庭の中でも兄弟が大勢あるが、その内の一人だけが熱心に信仰を求めて他の人々は割合に無關心であるなどと云ふ區別などもあつて、それらから推理して、その人だけの宿善が開發したのであり、他の人はたとへ宿善があつてもまだ開發の機が熟して居ないのであると考へられるところから、こうした言葉が出たものと思ひます。

ここの消息はまだ人智で解決し得るまでに至つて居ないのです。例へば同じ兄弟姉妹で居ながら顔立ちや背たけなどの相異がどうしてあるのか、單に時間的差異だけでは分りません。そればかりではありません。聲が違ひ智慧が違ひ健康が違ひます。双子などでも顔付は殆んど見分けの出来ないやうに同じですが、健康や聲量や身長や智慧などに相違がありますし、ほくろなどの有無等も異ります

が同じ境遇同じ條件であるにも拘らず、それが異なるのは何と云つてもまだ判らないのです。だから宿善とか何とか云はなくてはならないと思ひます。

五蘊假和合の理論から云ふと、過去から未來へかけて同じものが續くとは考へられませんが、それは遺傳とか影響とか云ふものがあるからであり、且つそれが極めて複雑でありその中の或ものは表現し、或ものは潜在して表にあらはれないから、それで相異があると考へられしますが、何故に顯現し何故に潜在するかと云ふその相異はよく判らないことです。また佛教では靈魂を語りませんが、業力と云ふものを考へて居ります。それはその人のかつてなした仕業の影響力のことです。それも多くは共業として影響するのであつてその影響を受ける受け方について色々と感受

性の異りがあることは是認出來ます。例へばラジオの受信器に色々な異りがあるやうなものです。今度の戦争に致しましても、皆な均しく苦惱をなめますが、人に依り境遇に依り職業に依り色々異りがあるやうなものです。因果律にあてはまらないことも、何の直接關係のなかつた是れから生れて來る子供達にも苦惱が附隨して居りそれも各人違つて受けるのでありますから、個人的でなく共同的でありながらも、その中におのづから個人的差異があるのは事實であつて理窟ではありません。こう云ふ點に於てまだまだ「業」の問題も今までの佛教常識では理解出來ないことが澤山あります。

こんなわけで貴氏のお質ねに對しては満足のお答へが出來ないことを白狀し且つおわびいたします。

護符や御札の効用

(問)

よくお寺やお宮で「お札」を出したり(例へば護摩札の如き)或は安産のお守りとか災難よけのお守りとか云ふものを出しますが、あれは一體どう云ふものですか。實際に効果のあるものでせうか。どうも

疑はれてなりません。何だか神社やお寺の飯の種のやうに思はれます。戦争などでもあつちこつちのお札を澤山貰つたり買つたりして持つて行つたものです。一つでは安心が出來ませんから随分澤山持つて行きました。あと

で考へると可笑しなものです。無いよりは有る方が心強つたです。然し多くは死んで行きました「たま」もよけずに死んで行きました。これ等について御説明下さい。

(奈良・磯城・三輪・櫻井生)

(答)

未開人の宗教にマナイズムと云ふのがあります。マナと云ふのは一種の靈力を云ふのですが、これが發展すると護符と云ふやうなものにもなるのであります。例へば何か形の變つた石でも拾ひますと、マナが宿つて居るかも知れないと考へますところから、之を土地の一隅に埋めて置いたとします。するとその年に椰子の實が澤山なつたとか芭蕉の實がよく出来たとかすると、之は確にマナが籠つて居るものと信じて取り出して御祭りすると共に、始終お經文見たやうな呪文を唱へるのであります。

こう云つた類の考へ方が段々生長いたしましてお札や護符などになつたのでありますから、佛教のやうな文化的高等宗教とは全然系統を異にして居るものですが、永い年月の間に段々色々なものが附隨して來ましたので、殊に眞言系統のものにさうした傾向が強く現はれて來て居ります。

そこへ行くと神道の方は原始宗教の系統で

すから、どんな小さなお宮でもお札を出して居ります。それがまたその神社の財源の一つにもなつて居る次第であります。

徳川時代に流行した「サムハラ」と云ふ災難除けの護符は、日清日露兩戰役の時また流行し、今度も「たまよけ」として相當に出たやうであります。字書にもないやうな變な字をかいであり、中には梵字で「サンバラ」とかいてあるものもあります。言ひ傳へでは加藤清正が槍ですか刀ですかに彫付け、家來達にもつけさせたなどと云ひますが、あてにはありません。

ところでその効用ですが、これは人間の心の弱さに對する「ツツカイ棒」見たやうなもので、不安に對する一種の氣安めでありますから憶病者も心丈夫になつて猪突の出來るところに効果があります。例へば彈丸があたりぬと信じて大膽な行動が出来るわけです。彈丸が當るか當らないかは保證出來ませんが勇敢になることだけはその護符の效果に相違ありません。

りません。支那の紅槍會などの刀匪が護符を口に含んで突進し、殺されてもすぐ人間に生れ更はると信じて居るなどは、護符に對する妄信の最たるものと云へませう。

また護摩札などは「護摩の祈禱」をしたと云ふ一つの證據物であり、昔はよく「身代」として衣服などを持參して祈禱して貰ひそれを病人にきかせて病患を安らかにさせると云ふことなどの類に均しいものかと存じます。護摩を焚くのは眞言系統ですが、印度では魔法使ひの女などがやつたものでせうか「摩登伽經」などにも出て居ます。色々な木を焚いて祈ると、相手方の人の心が朦朧となつて誘惑されるなど云ふことが書いてあります。元より佛教のものではなかつたのですが何時頃からが佛教の中に入り込んで來たものです。本當の效果があるかないか。元より精神的なものですから、與へられたものが「暗示」にかかつて効果ありと執するだけのものであります。こんなのは信仰の中に入れるべきたくひのものではありません。

信仰には入る順序があるか

(問)

私は信仰に入らうと思つて色々苦心しても居りもがいても居りますが、

或る人のお話に依ると信仰に入るには順序と云ふものがあつて、自分の思ふ通りにはなら

ぬものであるとのことでした。さう云ふものでせうか。また他の或る人は信仰にも進みと云ふものがあつて、段々進化して行くものであるとのことでした。然し私達のやうな素人考へでは、信仰と云ふものはそんなに變化する筈はなくむしろ一定不變のものが信仰だと思つて居りますが如何でせうか。どうもさつぱり分らないので迷つて居ります。どうぞ分りやすく教へて下さい。

(福岡・小竹・西名初之助)

(答)

よく信仰を求める動機については、逆境とか死に對する恐怖とか云ふものからなると云つて居ります。即ち病氣になつて容易になほらないとか。又は家内に病人が絶えないとか、色々な災難が湧いて來て不安であるとか、近親の死に依て死に對する恐怖におそはれたとか、その他色々な逆境に遭遇して宗教を求めるやうになる場合であります。然しこうした動機ですと、免もすれば迷信に陥り易い傾向がありますから餘程注意を要します。誰でも迷信だと思つて信仰に入る筈はなく、其人に取つては迷信とは思へず「救ひ」そのものに目がくらんで、溺るるもの薬をつかむと云ふことにもなるわけです。是に反して苦勞もなく苦痛もないが何とな

く人生に對して「このままではならぬ」と考へ信仰に依つて人生の生甲斐を感じ力強い生活に入りたいと思つて宗教を求める人は比較的批判の餘裕を持つて居りますから健全な信仰に入ることが出来るかと思ひます。

次は信仰過程に就いては一般に「求道、入信、修道」の三期に分けて居ります。求道時代はむしろ苦悶時代であり暗中摸索時代でありまして、丁度長いトンネルに這入つたやうに、光りを求めて徒らに苦慮し煩悶し藻掻きにもがくのです。が、然しこの苦悶が大きければ大きい程、長ければ長い程、入信の時の喜びは多大であります。それ故大いに苦しむのがよろしいのです。なまじい之れを助けてはいけません。中途半端の信仰になり易いからです。ですからその親切は却つて毒になります。禪宗などでは心經の注釋などを「毒語心經」となづけて居る位で、親切に注釋することは求道者に取つてはむしろ「毒」であるとして居ります。心の問題は自ら苦しんで開拓しなければいけないのであります。それ故「發得」とも云ひます。自ら發得するところに深い體驗があるのですから感銘も亦た大きく深いものがあるわけです。

何事も窮すれば通ずで、百尺竿頭に來て一

大飛躍がある筈です。此處に「入信」の因縁が熟します。大死するところ間髪を入れず自ら精神轉換することを「入信」と云つて居ります。禪宗などでは「悟即信」とも云ひますが、大悟すること即ち見性することであり自己の佛性を悟ることでもあります。それは瞬間かも知れません。人に依つては何邊も何邊も繰返し繰返し體驗する人もあるでせう。淨土教ではハッキリ自覺には上らないが何邊も何邊も念佛して段々に信が向上する場合が多いやうです。

イヤこの「入信」は深刻な體驗かも知れませんが、窮極のものではありません。そこに「修道」があるわけです。この「修道」こそは永遠の求道であり「修證一如」の求道であります。ですからこの「修道」こそが佛道修行の本筋であり本當の求道者の姿であります。

隨て信仰は此處に段々に精鍊され淨化され純化されて行きます。變化ではありませんが進化するのです。幼い信仰が段々に完成して行くのです。何と云つても初めのうちは精神界のことには暗いからよく分りませんが、段々明るくなつて來ます。沙彌から一足飛びに長老にはなれぬものです。だから「進み」はあつてよいと思ひます。とにかく一心に求めてさへ行けば色々経験して段々様子が分つて參りますから迷はずに一心におはげみ下さい。

編集後記

◇三四合併號を四月末に送つてから、四ヶ月が空しく過ぎました。

それは編集部が病氣したり事故があつたりした爲で、發送の方では随分あせりましたが、どんなにあせつても原稿がそちらへ行つて居たのでは何うしやうありませんでした。此點深くお詫致します。

◇それにこの四ヶ月間に紙は一躍數倍になり、印刷費もドンドン上がるばかりで、一方前金切の方が今月號を送ると半數以上にも殖るわけでしたから、随分心配いたしました。雑誌を送らなければ御入金が取れず、御入金がなければ雑誌が成立たぬ譯で、どの位氣をもんだか分りません。

◇その上私の身近にも變化がありまして今度から不在勝になりますから、次號から眞野先生に事務を取つて頂きます。編集の方も新しく若い竹中君吉田君が引受ける

ことになりましたから、私も肩の重荷がおりたやうな氣持です。本誌が復興してから丸三年半奉仕させて頂いたことを此機會に感謝いたします。

◇誌代は次號から別項のやうに値上げになります。此號から値上げしたかつたのですが、豫告しないではいけないと思つて次號からに致しました。帶封に前金切とありましたら。此難局をお救ひ下さる意味で早速御送金下さいませやう幾重にもお願いいたします。

◇從前の通り「信仰相談」の方はお引受けして居りますので、ドシ
 ドシ御質問をお寄せ下さいまし。御質問はなるべく理窟をさけて情味あるものにして下さい。大分理窟が多いとの御叱りがあります。是非理窟に關係しない情意的な御質問を歓迎いたします。

◇發行のおくれたのを取りかへす爲に、次號も七八合併號とし、九月號からは月を追つて發行し、十二月には來年の一月號が出せるやうにしたいと思つて居ります。合併號は一年に三回しか許されませんのですから、厭でも應でもさうしなければなりません。皆様の御援助をお願い致します。(中村)

値上げ豫告

紙代印刷代人件費交通費等の暴騰の爲にどうしても誌代の値上げをしないでばならなくなりましたから、是非本會を御援助下さる意味で御諒承を頂き、御送金下さいませやう呉れ々々もお願いいたします。

浄土誌代

壹部金拾圓 送料二圓
 壹ケ年金百貳拾圓 送料二十四圓
 (壹ケ年送料共百四十四圓)

今度から振替手数料は廢止になりましたから御加へ下さらなくともよろしいです

振替口座東京八二一八七番

法然上人鑽仰會

昭和十年五月廿日 三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
 昭和二十三年五月廿日印刷 昭和二十三年六月一日發行

浄土 第十四卷 第四號

「浄土」 五・六月號

昭和十年五月二十日
 第三種郵便物認可

昭和廿三年四月二十日印刷
 昭和廿三年五月一日發行
 (定價七圓)

編輯兼 中村 辨 康
 發行人 中村 辨 康

印刷人 春山治部左衛門
 東京都千代田區神田保町三ノ十

印刷所 共立社印刷所
 東京都千代田區神田保町三ノ十

配給元

東京都千代田區淡路町二ノ九

日本出版配給株式會社

發行所 法然上人鑽仰會

東京都港區芝公園淨土宗事務所

振替東京八二一八七番

會員番號B一〇八〇一四

次號ヨリ

會費 金百四十四圓
 一ケ年 (送料共)

定價金 七圓 (送料共)